

32 文学的文章 (11) (小説)

練成問題

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

翌日の朝洋一は父と茶の間の食卓に向かった。食卓の上には、昨夜泊まった叔母の茶碗も伏せてあった。が、叔母は看護婦が、長い身じまいをすませる間、母の側へその代わりに行ってるとかいうことだった。親子は箸を動かしながら、時々短い口を利いた。この一週間ばかりというものは、毎日こういう二人きりの、寂しい食事がつづいている。しかし今日5はいつもよりは、一層二人とも口が重かった。給仕の美津も無言のまま、盆をさし出すばかりだった。

①「今日は慎太郎が帰って来るかな。」

賢造は返事を予期するように、ちらりと洋一の顔を眺めた。が、洋一は黙っていた。兄が今日帰るか帰らないか、——というより、②「いつたい帰るかどうか、彼には今も兄の意志が、どうも不確かでならないのだった。」

「それとも明日の朝になるか？」

今度は洋一も父の言葉に、答えない訳にはいかなかった。

「しかし今は学校がちょうど、試験じゃないかと思うんですがね。」

「そっか。」

賢造は何か考えるように、ちよいと言葉を途切らせたが、やがて美津に茶をつがせながら、

「お前も勉強しなくちゃいけないぜ。慎太郎はもうこの秋は、大学生になるんだから。」と言った。

(中略)

洋一は、そこからすぐに梯子を上がって、例の通り二階の勉強部屋へ行った。が、机に向かつてみても、受験の準備は言うまでもなく、小説を読む気さえ起こらなかった。机の前には格子窓がある。

——その窓から外を見ると、向こうの玩具問屋の前に、半纏着の男が自転車のタイヤへ、ポンプの空気を押しこんでいた。何だかそれが洋一には、気ぜわしそうな気がして不快だった。といってまた下へ下りていくのも、やはり気が進まなかった。彼は、とうとう机の下の漢和辞書を枕にしなが、ごろりと畳に寝ころんでしまった。

すると彼の心には、この春以来顔を見ない、彼には父が違っている、兄のことが浮かんできた。①彼には父が違っている、——しかしそのために洋一は、一度でも兄に対する情が、世間普通の兄弟に変わっていると思ったことはなかった。いや、母が兄を連れて再縁したということさえ、彼が知ることになったのは、割合に新しいことだった。ただ父が違っているといえば、彼にはかなりはつきりと、こんな思い出が残っている。

それはまだ兄や彼が、小学校にいる時分だった。洋一はある日慎太郎と、トランプの勝敗から口論をした。その時分から②「※」な兄は、彼がいくらいきり立つても、ほとんど語気さえも荒立てなかった。が、時々蔑むようにじろじろ彼の顔を見ながら、一々彼をきめつけていった。洋一はとうとうかっとなつて、そこにあつたトランプをつかむが早い、いきなり兄の顔へたたきつけた。トランプは兄の横顔にあたって、一面にあたりへ散乱した。——と兄の手が、ぴしゃりと彼の頬をぶった。

「生意気なことをするな。」

そう言う兄の声の下から、洋一は兄にかぶりついた。兄は彼に比べると、はるかに体も大きかった。しかし彼は兄よりもがむしゃらなところに強みがあった。二人はしばらく獣のように、なぐったりなぐられたりし合っていた。45その騒ぎを聞いた母は、慌ててその座敷へ入ってきた。

「何をするんです？ お前たちは。」

母の声を聞くか聞かないうちに、洋一はもう泣き出していった。が、兄は目を伏せたまま、むっとりたたずんでいるだけだった。

「慎太郎。お前は兄さんじゃないか？ 弟を相手に喧嘩けんかなんぞして、何がお前は面白いんだえ？」

母にこう叱しかられると、兄はさすがに震え声だったが、それでも突っかかるように返事をした。

「洋一が悪いんです。先に僕の顔へトランプをたたきつけたんだもの。」

「嘘うそつき。兄さんが先にぶったんだい。」

洋一は一生懸命に泣き声で兄に反対した。

「ずるをしたのも兄さんだ。」

「何。」

兄はまた\*擬勢を見せて、一足彼の方へ進もうとした。

「それだから喧嘩になるんじゃないか？ いったいお前が\*年かさなくせにかんべんしてやらないのが悪いんです。」

母は洋一をかばいながら、こづくように兄を引き離れた。すると兄の目の色が、急に無気味なほど険しくなった。

「いいやい。」

兄はそう言うより早く、気違いのように母をぶとうとした。が、その手がまだ振り下ろされないうちに、洋一よりも大声に泣き出してしまった。

母がその時どんな顔をしていたか、それは洋一の記憶になかった。しかし兄のくやしそうな目つきは、今でも3まざまざと見えてくるような気がする。

兄はただ母に叱しかられたのが、かんしゃくにさわっただけかもしれない。4もう一歩憶測をたくましくするのは、よくないことだという心持ちもある。が、70

兄が地方へ行って以来、ふとあの目つきを思い出すと、洋一は兄の見ている母が、どうもB彼のB見ている母とは、違っBていそうBに思われるのだった。しかも

かもうそういう気がしたのには、もう一つ別な記憶もある。

三年前の九月、兄が地方の高等学校へ、明日立とうという前日だった。洋

55

一は兄と買い物をして、わざわざ銀座ぎんざまで出かけていった。

「当分\*大時計とも絶縁だな。」

兄は尾張町おわちやうの角へ出ると、なかば独り言のようにこう言った。

「だから\*一高へ入りゃいいのに。」

「一高なんぞちつとも入りたくはない。」

「負け惜しみばかり言っおてらあ。田舎へ行けば不便だぜ。アイスクリームはなし、\*活動写真はなし、——」

洋一は顔を汗ばませながら、まだ冗談のような調子で話し続けた。

「それから誰か病気だになっても、急には帰ってこられないし、——」

「そんなことはあたりまえだ。」

「じゃお母さんでも死んだら、どうする。」

歩道の端を歩いて歩いた兄は、彼の言葉に答える前に、手を伸ばして柳の葉をむしった。

「僕はお母さんが死んでも悲しくない。」

「嘘うそつき。」

洋一は少し興奮して言った。

「悲しくなかったら、どうかしていらあ。」

「嘘うそじゃない。」

兄の声には意外なくらい、感情のこもった調子があった。

「お前はいつでも小説なんぞ読んでるじゃないか？ それなら、6僕のような人間のあることも、すぐに理解できそうなんだ。——おかしなやつだな。」

洋一は内こ心こぎよつととした。7と同時にあの目つきが、——母をぶとうとした兄の目つきが、はっきり記憶に浮かぶのを感じた。が、そつと兄の様子を見ると、兄は遠くへ目をやりながら、何事もないうように歩いていた。

そんなことを考えると、兄がすぐに帰って来るかどうか、いよいよ怪しいような心持ちがする。ことに試験でも始まっていれば、二日や三日遅れるこ

100

90

85

75



□(7) — 線⑤「洋一は少し興奮して言った」、⑦「洋一は内心ぎよっとした」とありますが、⑤から⑦への洋一の気持ちの移り変わりとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア〔反発 ↓ 動揺〕
- イ〔嫌悪 ↓ 驚嘆〕
- ウ〔心配 ↓ 恐怖〕
- エ〔不満 ↓ 納得〕

□(8) — 線⑥「僕のような人間」とは、具体的にはどういう人間ですか。書いて答えなさい。

□(9) — 線⑧「洋一はそう言う叔母の言葉に、かすかな皮肉を感じながら」とありますが、洋一が感じ取っている叔母の気持ちとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 家族のことを心配してよくよと悩んでいる洋一をからかおうとする気持ち。
- イ 洋一が母親のいない家庭で寂しがっているのではないかと考え、なくさめようとする気持ち。
- ウ 勉強もしないで、母親のそばにもいかない洋一を、それとなく非難する気持ち。
- エ のんびりと昼寝を楽しんでいるかのような洋一を見て、うらやましが  
る気持ち。

□(10) 本文中から、二つの過去の出来事の描写にはさまれる形で、現在の洋一の心の内が説明されている一続きの部分を探し、その最初の一文の初めの七字と、最後の一文の終わりの七字（句点も字数に数えます）を書き抜いて答えなさい。

□(11) 本文中から読み取れることに合っているものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 洋一は、父親の賢造が実の息子ではない兄のことを嫌っていると感じている。
- イ 洋一は、自分と兄とが異父兄弟であるということを、幼いころは知らなかった。
- ウ 洋一は、兄が家を出ていったのは、自分との仲が悪かったためだと考えている。
- エ 洋一は、三年前の九月に兄が地方の高等学校へ行って以来、兄とは会っていない。